

肉や魚はご法度 ご飯何杯も

いま No.650
子どもたちは
お坊さん高校生 ④

高野山高校には校舎と棟続きの寄宿舎がある。内堀陽君(18)はここで3年間を送った。寮生の生活も、寺に住み込む寺生と変わらず、修行中心だ。

午前6時起床。試験期間などを除き、6時40分からお勤めがある。高野山は1月となれば零下10度まで冷え込む日もある。昭和初期に建てられた講堂は荘厳だが、暖房器具はない。身を切られるような寒さの中、僧衣に身を包んで仏さまの前に正座し、お経を30分間上げ続ける。宗教科OBで、寮監として生徒たちと寄宿舎で暮らす上田希一(教諭)は「寒さに体を慣らして頑張り」と励ます。

お勤めを済ませれば朝食。ただし、お勤めがある日の食事は「精進」で、肉や魚はご法度だ。12月のある日のメニューは、ご飯、キャベツと油揚げが具のみそ汁に、梅干しなどの漬物もだけ。同じ寮生でも、普通科の生徒の朝食には魚や肉のおかずがついている。食事作法も細かく決まっている。食事前、10分ほどお経を上げなくてはならない。読経が済むと、ふたに米を数粒取り分



寮舎の食堂で精進の朝食を作法に従って食べる内堀陽君(右端)と和歌山県高野町

ようちやく箸をつける(右)は、すでにみそ汁は冷め始めている。それでも、食べ盛りの生徒たちは、おかわりできるご飯にふりかけをかけ、何杯もたいらげる。

6時限の授業を済ませば、寮へ帰って自由時間となる。読書好きの内堀君は町に1軒だけの本屋に行くのが楽しみだ。寄宿舎の門限は夕食が始まる午後6時半。普段は肉食もでき

るが、毎月20日は弘法大師の縁日の前日あたり「精進」食となり、おでんがほとんどだ。8時50分からは夜のお勤めで再びお経を上げる。消灯は11時。まさに修行中心の毎日に見える。ところが、内堀君は「もっと本格的だと思っていた。がっかりです」。

内堀君の実家は寺とは縁がない。ただただ「修行をして立派な僧侶になりたい」一念で横浜市から高野山にやってきた。「結婚だって、しないつもりです。それなのに」

(三橋麻子)

戒律守り 「結婚しなくていい」

いま No.651
子どもたちは
お坊さん高校生 ⑤

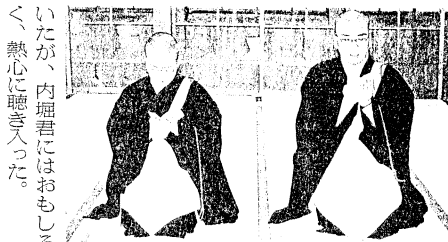
高野山高校で、3年生きつての優等生である内堀陽君(18)。横浜市出身で、子どものころからの歴史好きだ。毘沙門天を厚く信仰した上杉謙信に憧れ、中

学で剣道部に入り、仏像を彫ったこともある。中学の時、僧侶になろうと決めた。どうせならと、宗教科がある高野山高校を選んだ。謙信も修行を望んだとされる密教の本場。「どれほど厳しい修行をしているのか」と期待した。

ところが、町には普通に車が行き交っていた。「近くにカラオケボックスがない」とほやかと同級生。精進食の日に、寄宿舎で出された夕食のおでんには、

チクロが入っていた……。多少想像とは違ったが、ほかの高校では経験できない毎日だったのは間違いない。入学直後の「得度」の儀式には感動した。白装束で髪をそり、亡くなった人のように戒名をもらって仏の道に入るのだ。

「仏教の目的は成仏にある。成仏とは仏になることだ」とその意味を、教義の授業で富田向真教諭(41)が説いてくれた。教室内には眠そうな生徒も



極寒の中、朝のお勤めをする内堀陽君(右)と和歌山県高野町

生徒会長として学校に働きかけ、暗い夜道に街灯をつけてもらった。法会では、たびたび重要な役を任された。内堀君は清舌が抜群で、唱えるお経はよく通る。発声を鍛えるため、寮でルームメイトに腹を押してもらい、腹式呼吸の練習を重ねた。

「実家がお寺ではないから、頑張りなさいといけいけ」。その思いに突き動かされてきた。明治以後、僧侶の結婚が認められ、寺は世襲が増えた。高野

山高校の目的のひとつは、寺の子弟を後継者として育成すること。寺と無縁の人が住職になるのは容易ではない。

自分はお坊さんとして、戒律をできるだけ守っていきたくて思う。もちろん、現代社会では、それが難しいのはわかっている。それでも、やっぱり自分は「結婚しなくていい」と思う。「踏み外したら」一氣にいってしまいたい。謙信を行動するお坊さん。「聖」になりたい。まずは、高野山大学に進み、学問を深めるつもりだ。

(三橋麻子)